

あ と が き

いかがでしたか？

明日にでも実践しようと思えるものがあったでしょうか？ すでにやっていると思うものもあったのではないのでしょうか。

先生方の日常には、子どもの前で「どうしたらうまくいくのだろう」と思案する場面がいくつもあることと思います。そこで、いろいろ試しながら、子どもの姿が見えてくるのでしょうし、その試行錯誤を経て、子どもがもっとも身近に求める最良の環境が用意されていくのだと思います。足場を固め、杖を提供し、次の一步をどの岩に踏みしめるか、その見定めを描き出したと思って、この本をつくりました。

指導の場や、対象の子どもは、特別支援学級、通級指導教室、そして通常の学級と、さまざまです。私たちは、場や役割を超えて、子どもの実態を超えて、役立つ支援を探り出していき、その発想と実りある関わりを目指すプロセス自体を伝えていきかけたのです。ですから、教材も関わりも、素朴な発想からの出発です。皆さんが「このくらいならやれてる」「もっとやれる」と思えるものを見て、すぐにアレンジできる、そのための土台だけを提供したいと思ったのです。そのまま使うだけでは、ネタ切れになります。発想の枠組みを知っている人は、そのままを超えて活かしてくださるでしょうから（CD-ROMに収録したツールは、そのまま印刷して使っていただけるものですが、アレンジして使っていただいてもかまいません）。

子どもの成長は、教師主導ではなく、子ども主体でこそ、豊かなものになります。

しかし、発達に偏りのある子どもは、支援され続ける被支援者と思われがちです。大人主導で、指導され続け、支援も受け続けるのでしょうか？ いいえ、いい支援に出合えるほど自立していくと信じています。

子どもの中には、メインルートを順調に登る子どももいますし、違うルートを一步一步、登る子どももいます。さらに異なるルートを足早に登る子どももいるでしょう。どれにも優劣はありません。ただ、メインルートしか見えない人が多い中、サブルートを見つける達人が増えてほしい。それだけ、彼らの歩みにつながるからです。

この本で、先生方が少しでも、「サブルート探しは面白い」「教材づくりが楽しい」と思っただけならば、本望です。成功した教材を仲間と共有して、子どものために生かしてほしい、そのように願っています。

この本をつくるにあたって、たくさんの方々からご協力をいただきました。ほんの森出版の兼弘陽子氏には、関わりやツールのよさを最大限に引き出していただき、大いに勇気づけられました。

この本が、教師の日常の中で、子どもの姿を思いながら、教材を工夫する楽しさを思い起こさせる力になることを祈っています。

高橋あつ子